

IAAL

Institute for Assistance of Academic Libraries

ニュースレター

アイアールニュースレター

【特集】

大学生のITリテラシー

OCT. 2009

No.4

デジタル化最前線

大日本印刷(株)

盛田 宏久

今まで、ゆっくりと流れていた感のあるコンテンツのデジタル化の波も、どうやら潮目が大きく変わってきたようです。そこにはいくつかのキーワードがあります。「保管から公開へ」、「各機関の評価制度導入」、「地域連携・活性化支援事業」、国立国会図書館の「電子図書館構想」、そして日本の出版社を慌てさせた「グーグル問題」などです。これらは、閉架書庫にあった貴重書のデジタル化や、出版社の本のデジタル化を促進させる触媒となっているように思えます。

「本のデジタル化」について、大きな動きは、「グーグルブック検索」や国立国会図書館の「電子図書館構想」です。同図書館のデジタル化については、予算が計上されたり、著作権法が改正されるなど「本のデジタル化」に対し今までに無い規模とスピードで進み始めました。デジタル化によるメリットは、利用者が時間や場所に制限されずに欲しい情報を得ることが出来る利便性を得られると共に、図書館では物理的な本の保管場所や蔵書の劣化といった問題の解決につながります。勿論、著者や出版社を初めとする様々なステークホルダーの意見調整を行いつつ進める必要がありますが、1455年頃のヨハネス・グーテンベルクの活版印刷発明以来、紙とインクで作られてきた「本」は、デジタル化によって様々なバリエーションを持った「本2.0」として新たな進化を遂げる予感がします。欧米では

図書館が連携して貴重書のアーカイブを公開する動きが盛んになったり、お隣の韓国でも国立の電子図書館がオープンするなどしています。

日本もこれを機に、多くの機関が積極的に取り組んでいくことを期待すると共に、これらの取り組みを連携させ、より付加価値の高いコンテンツとして、日本国内にとどまらず、世界中で利用いただけるものにしたいですね。

貴重書のデジタル化についても様々な動きがありますが、私どもでは、1999年にグループの技術を結集し、「匠プロジェクト」をスタートしました。これは、「文化財の保存と次世代への継承」を目的とし、高精細デジタル再製画「伝匠美」の技術開発を行い、従来技術的に困難と言われた、金箔上の印刷や天井画・杉戸絵の再現などを可能にしました。今日では、襖絵をはじめ壁画・天井画・屏風・掛軸など、全ての日本画の表現技法を再現できるように、国立博物館や著名な寺院にて採用いただいています。また、新しい取り組みとして、プリントオンデマンド技術を用いた複製本を制作し、より多くの方に貴重書を身近に感じてもらう試みも始めています。私たちは、今後も“文化財を多くの人に”そして“子孫のために”熱意と誇りを持って邁進していきたいと考えています。

デジタルネイティブ世代に スキルはあるのか

大学図書館支援機構 理事長 上田修一

もう17、8年前の専用ワープロの全盛時代のことです。ある学生が、古いワープロを使っていたのですが、どうも様子がおかしい。わずかな修正に、大変時間がかかっていました。例えば、10ページの文章の3ページ目にある文に5文字追加するとした場合、残りの7ページを5文字分、全部ずらして入力し直していたのです。要するに「挿入」ではなく、「上書き」で全部を処理していました。この学生が「挿入」モードを知らなかったのか、ワープロのその機能が壊れていたのか覚えていません。

Office2003のExcelで作ったグラフの背景は、デフォルトがグレーです。背景がグレーの図など他人に見せられるものではありませんが、白に変えるように指摘しない限り、学生の図の背景はグレーのままとなります。これは、マイクロソフトの間違った設定をそのまま使っているからですが、マイクロソフトはオフィス2007ではデフォルトをこっそりと白に変えています。

学生は、ITスキルに無知なために、問題があると力わざで片付けることがよくあります。また、自分の基準がありませんから、ソフトの言いなりになっていることがしばしばです。

さて、情報リテラシー教育の前提となる大学生のITスキルはどのように教えられ、どの程度なのでしょう。

表1は、現在の大学生の状況です。総勢2,000万人超の平成生まれの波は、第三学年まで押し寄せています。最近よくきく「デジタルネイティブ」について、その啓蒙書『デジタルネイティブの時代』（東洋経済新報社、2009年）の中で木下晃伸氏は、「『デジタルネイティブ』とは、生まれたときからインターネットが身近にあふれ、それを使うことが当たり前になっている世代のことです。生まれ年で、平成元年以降に生まれた世代」と述べています。インターネットが身近にあふれるのは平成10年くらいからだろうと思いますが、それはともかく、大学生は今や「デジタルネイティブ」世代です。

高校で「情報」を受講した学生が第四学年となっています。教科「情報」は、1990年代後半の議論を経て、2003年度から高校で必修となった科目です。選択重視の中で必修化したのですから、国が「情報教育」を重視していることがわかります。ただ、高校側は冷ややかで、全国高等学校長協会はこの科目を必修から外すように要望書を出しています。

表1

年度	学年	生年	
2009年度	第一学年	1990/91	平成生まれ (デジタルネイティブ)
	第二学年	1989/90	
	第三学年	1988/89	平成生まれ含む
	第四学年	1987/88	高校で「情報」を履修開始

高校で学ぶ生徒は、総合的な内容の「情報A」、工学志向の「情報B」、文系と言われる「情報C」のいずれかを履修します。どれも2単位科目で、50分授業を毎週2回、一年間に35週受けることになりますから、かなり力がつくはずです。また、教科『情報』の教科書は、コンピュータやインターネットの基本的な知識をコンパクトに網羅し、良く出来ていると言われています。

ところが、この教科「情報」には、問題が山積しています。2006年に受験に無関係な高校の必修科目の未履修が各地で常態化していることがわかりましたが、「情報」も未履修である事例が見つかりました。情報処理学会は、(1)「情報」の重要性が生徒や他教科教員に認識されにくい状態にある、(2)「情報」の教員へのサポートが少ない、(3)「情報」の教員に他教科の兼任を要請されている例が多い、

(4)「情報」を入試に出題する大学が少数しかない、といった問題点を指摘しています。

九工大の西野和典氏は、教科「情報」の理解度診断評価テストを開発し、2007年度に全国11大学の1,445名の新入生を対象として調査を行いました。その結果が表2です。ソフトウェアの利用はまあまあ、仕組みや社会には弱いという傾向が見て取れます。けれどもこれは平均であり、ソフトウェアを使うスキルも、学生によって大きく異なるのが実情です。

高校で必修になっても、大学生のITリテラシーの程度はバラバラであり、当分、こうした状態が続きます。このくらい知っているだろうと思っても知らないものが大多数、かといって基本から始めようとする、たちまち退屈そうな顔をするのが「デジタルネイティブ」です。

表2

項目	正答率 (%)
情報の受発信とその手段	74
情報検索	79
ワープロソフトの利用	80
情報表現の工夫	62
プレゼンテーションソフトの利用	55
情報の評価と更新	77
文字と数字の表現	15
データ圧縮	49
ソフトウェア	66

項目	正答率 (%)
コンピュータの構成	31
記憶装置	53
情報通信ネットワークの仕組み	74
アクセス制御とファイアウォール	41
学習方法の変化	40
電子商取引	11
個人情報の流出	34
コミュニケーションとその変遷	28
インターネットと犯罪	83

大学における ITリテラシー教育

慶應義塾大学 文学部非常勤講師 中島玲子

「デジタルネイティブ」と呼ばれる今の大学生は、ほとんどが自宅にネット接続できるPCを保有して自由に使い、掌中の携帯端末をなめらかに指先で操っては、コミュニケーションツールとして、カメラとして、各種プレイヤーとして、多様な目的に駆使しています。4～5年前、休み時間に質問に答えていてある漢字を思い出せなくなったときに、学生が電光石火の早業で携帯電話を取り出して画面上にその漢字を出してくれたことがあります。その早さには本当に驚きましたが、今はもっと進化していることになります。

しかし、彼らも学業でのPC利用となると若干様子が変わってきます。高校で教科「情報」が必修となった学生が入学し始めたのが2006年度で、現在の学部生の大部分が教科「情報」を経ているはずですが、いくつかの大学で担当している情報リテラシー関係の演習では、ログインやマウス操作に支障はないものの自らをPCの「初心者」あるいは「苦手」と評する学生が少なからず存在します。

教科「情報」必修化は「大学2006年問題」の1つとして大学の情報教育関係者の間で話題となり、新入生はWordやExcelの操作を身に着けているのだから、今後は情報リテラシーの授業ではより高度な演習やレポートラ

イティングに注力すべきという論調にもなっていました。ところがふたを開けてみるとPC操作の習熟度は例年と大差なく、結局WordやExcelの基礎をやることになりました。

年々この傾向は改善され、今は高校でのWord、Excelの使用経験を前提としています。が、本当に履修したのかと思う学生や、未経験と言う（思い込んでいる）学生もいます。反面PowerPointやホームページ作成まで中学校で習ったという学生も時々いて、スキルのばらつきが授業をやりにくくしています。

もっともWord経験者でも長めの定型文書作成になると青息吐息になってしまいます。教科「情報」の履修は高校1年次が主流という報告もあり^{*}、大学入学時にはすっかり忘れてしまうのが実情のようです。Excelは「苦手」を通りこして「嫌い」という学生が少なくありません。複雑な関数計算やグラフ作成の機能を教わっても実用が思い浮かばず、なんだかややこしいものという印象だけが残っているようです。

現在では、著しくスキルの低い学生の対応で授業進行が遅れることも少なくなりましたが、少数派のスキルの低い学生は個別対応を重荷に感じてか却って途中放棄しやすくなっています。大学入学時と卒業時の全員のITリ

テラシーを測る手立てはないので推察でしかないのですが、苦手意識からそもそも情報関係科目を履修しない可能性も考えると、ITリテラシーが低いままかなりの学生が卒業しているでしょう。

それにしても携帯端末を易々と使いこなす彼らが、なぜPCは得意と思えないのでしょうか。昨年度、履修生に「PCが使える人のイメージ」を聞いたことがあります。彼らのイメージする「普通の人」は、ExcelとWordを困らずに使える、検索エンジンが使える、タッチタイピングができる、PCとケンカしない等でした。これはほぼ正しい認識ですが、「使える人」となると、高速タッチタイピング、あらゆるソフトが使える、プログラミング、ホームページ自作、ハッカー、冷静沈着で知能指数が高い等、一般のPC利用の範疇を外れたものまでありました。これでは道のりは果てしないでしょう。

「使える人」は端的には「使い慣れている人」です。PCの基本操作を習得した上で、ソフトに何ができて何ができないかを知っている（推論できる）、困ったときにヘルプやWebなど

を調べて自力である程度対処できる、さらにタイピングが正確でもたつかず、ショートカットキーを何種類か使っていれば十分でしょう。これは学生の理想よりかなり低いですが、実際、このレベルの人にはめったにお目にかかりません。

さきほど「PCとケンカしない」という表現があったように、確かに今のPCとはケンカになりがちです。しかし現在PCがデファクトスタンダードである以上、避けては通れません。苦手意識を払拭し自立したユーザになるためにも敵を知ることは重要です。一方、レポートの体裁や情報利用の範囲にしても、大学では大学での活用に必要なITリテラシーがあり、学生もそれに基づいて経験を積む必要があります。学年や習熟度に応じた継続的なITリテラシー教育は必要と思います。

大学では初年度に手ほどきだけして、あとは各人まかせの傾向がありますが、個別スキルのばらつきや情報環境の変化の早さも考慮すると、学生はもちろん教員にも酷な状況です。

* 財団法人 コンピュータ教育開発センター、平成20年度「高等学校等における情報教育の実態に関する調査」、
<https://www.cec.or.jp/CEC/index.html> (2009/08/22 アクセス)



丹念な作業を経て、現代によみがえる作品には国宝級の作品も含まれる

伝統の技と最新技術で あらたな保存・閲覧の 方法を作り上げる

図書館に所蔵されている古い書籍や地図には、ときに経年変化による劣化の激しいものも見受けられる。こういった蔵書を今後どのように保存し、閲覧を行っていくかという問題は図書館が解決していかなければならない命題のひとつである。そういった状況下にあって、「伝統技術で修復し、最新のデジタル技術で保存する」ことを業務とする現代の「経師」、株式会社大入の品川晃二さんに話を伺った。

時代に合わせて変化する「経師」

まず「経師」についてお話しさせてください。「経師」は奈良時代にお経を書写（写経）する職業として登場しました。奈良時代は仏教が国家事業として推進された時代で、当時の写経所には「経師」の他に、写経された内容に間違いがないかのチェックをする「校正」、写経された紙を巻き物に仕立てる「装潢」といった人たちがいて分業で作業をしていました。平安時代になると僧侶や好学者がそれぞれで写経を行うようになったので、「経師」は「装潢」の仕事もするようになっていったのです。木版印刷が発達していった室町時代には装幀の仕事を確認し、江戸時代には装幀だけでなく印刷業も兼ねて版權を持った出版も行っていました。時代に合わせて「経

師」の仕事も変化してきましたが、永年に渡って経典、書画、典籍の製作に携わってきたわけですね。

現代の「経師」である私たちは装幀の仕事もしていますが、文化財を保存するために「経師」の技術を活かしたいと思っています。具体的には文化財の修復や複製品（レプリカ）の作成、帙などの保存容器製作を行っています。もちろん伝統的な技術だけに固執しているわけではありません。時代に合わせて変化してきたのもまた「経師」の姿ですから、最新のデジタル技術も駆使しながら新しい保存の在り方をご提案しています。



オーダーメイドで作られる帙。ここにも長年の伝統からくる技術が注ぎ込まれる

修復のための現状記録

経年変化による劣化は避けられない現象です。だからといって人の目に触れないように保存するだけでは、展示や閲覧、研究ができません。こういったジレンマは文化財の保存という問題に必ずついてまわる問題ですね。

古地図を例に挙げてお話しします。ここに虫食い、欠落など、破損している大きな古地図があるとしま

す。古地図そのものを
温湿度管理が行き届い
た収蔵庫に保管して、
誰も触らなければこれ
以上劣化していくこと
はないかもしれません。
ですが古地図に記され
ている貴重な情報も死
蔵することになります
から、結局は利用する
たびに収蔵庫から出し
てきて拵げることにな



移動や持ち出しが困難な原本などを、
保管場所まで搬送しスキャンできるス
キャナーは2×2メートルの大判サイズ
までを対応。これまでの経験から得た
機能が盛り込まれている

ります。いくら丁寧に扱っても、拵げて折りたたむ
ことを繰り返すと地図へのダメージは避けられませ
ん。そうなるとやはり利用に耐えられるように修復
した方がいいでしょう。修復するにあたっては、ま
ず詳細な調査を行います。修復といってもオリジナル
に手を加えるわけですから、何かあったときには
元に戻せるようにしておかなくてはなりません。そ
のためにも「どこにどんな破損があるのか」といっ
た正確な記録を残す作業は大変重要です。

この記録をとる作業にはスキャナーなどのデジタ
ル技術が大いに役立ちます。古地図もそうですが書
画などサイズが大きいものは超高精細大型スキャナ
ーを使用します。このスキャナーは非接触タイプです
のでスキャンによってオリジナルを傷付けることは
ありません。このように現状の記録をしっかりと残し
た上で、修復すべき箇所の破損・欠損に合わせた修
復方法を検討し、必要に応じた修復を施していきます。

「平成の経師」の役割

近年「デジタルアーカイブ」が注目されています
ね。もちろん実物を利用できた方がいいのですが、
先ほども申し上げましたように原本を利用して
いればどうしても劣化は避けられません。原本を
しっかりと保存し、公開はデータ化したものを使用
するのは良い方法だと思います。

先ほどお話しした超高精細大型スキャナーは光沢
感や陰影など表面の質感を忠実に読み取りますし、
複製品を作成できるくらいの精度を持っていますか
ら、よりオリジナルに近いデータを見ていただくこ
とができると思いますよ。データがあれば様々な形



伝統の技を活かした 修復技術

「漉き繕い」による虫損の修復

ポピュラーな破損である虫損は、虫食いの穴に
合わせて切り抜いた和紙によって穴を埋めていく
作業が一般的だが、和紙の繊維を溶いた液体を虫
食い部分に流し込んで乾燥させる「漉き繕い」と
いう技術を使えば作
業時間が大幅に短縮
でき、コストも下が
る。穴を埋めている
繊維は取り去って元
の状態に戻ることが
でき「可逆性」にお
いても優れた手法で
ある。



「漉き繕い」で流し込む液体は紙質、
紙色ごとに調整され、きわめて自
然な仕上がりを見せる

装幀の修復

革装幀書籍の修復は原本の残存している部分を
薄く削ぎ取り、新しい革を裏打ちする方法で行う。
見返し部分のマーブル紙は残存している部分をス
キャンして欠損部分を補うなど、最新の技術も活
用しながら再製本す
る。ページを綴じる
針金が錆びてしまっ
た古い雑誌なども綴
じ直すことで保存に
適した状態にすること
が可能だ。



主に洋書関連が多い
革装本の修復

で活用できますからね。

こうしたデジタルの技術や伝統の技を駆使して
「文化財を保存する」ことが私たち「平成の経師」
の役割だと考えています。「経師」を生業にしてい
る会社は少なくなりましたが、これからも
伝統の技と最新の技術を融合させて先人たちから受
け継いだ文化財を未来に受け継いでいけるように頑
張りたいと思います。



株式会社 大入

昭和26年創業。美術品・書籍・文書等、文化財
の修復及び保存に関する業務を行う。和綴じ本・
折本・画帖・卷子・革装本等の和洋製本全般や国
宝『東寺百合文書』の保存容器を始めとする保存
容器の作製にも実績がある。

お問い合わせ

☎ 075-212-0248

URL : <http://www.ooiri-co.com>

言語コードではない？ TXTLは本文の

「TXTLフィールドには、本文の言語に対応する言語コードをデータ要素として記録する」(CM 2.1.8C C1)とあります。それでは本文が複数の言語で書かれている場合はどうするのかというと、「当該目録対象資料において優勢な言語の順にコードを記入する」(CM 2.1.8D D3)ので、例えば論文集などで、本文の著作が日本語と英語のものが収められている場合は、量の多いものから記入すれば良いと考えられます。

ところが資料の種類によっては、本文中に収められている量の順にはならないものもあります。それは、書誌、データ表、文法書等です。書誌、索引等、およびデータ表については「凡例、解説等の言語」を、文法書、対訳等、および多言語辞書(英和辞典等)については「本文中にある、主たる利用対象者の母語」を記入する事になっています(CM 2.1.8E《注意事項》E2)。前者については、凡例や解説は本文ではないし、後者については、英語の文法書で英文の方が多い時にもこれを適用して良いのか、あるいは英日の対訳の場合は英語の方が向かって左側のページにあることが多いので、英語が先の方が良いのではないかと、などという疑問も生じます。そもそも本文の言語を記入するフィールドに、利用者の母語がなぜ関係するのでしょうか。

なぜこうなるかを考えてみますと、これらの資料の場合に規定されている一番優勢な言語とは、本文の言語という意味ではなく、著者等が著述した際に使用している言語である、と言えるかもしれません。書誌、データ表は、著者等が著述しているのは本文ではなく凡例や解説の部分ですし、文法書や対訳についても著者が著述している部分は、量の多寡に関わらず、利用対象者の母語の部分です。

TXTLは本文の言語コードである、とだけ覚えていると、これらの例外に対応できないかも知れませんね。

(IAAL事務局：K生)

研修事業

■中京(名古屋)地区派遣・委託業務 スタッフ研修

中京(名古屋)地区では、派遣・委託業務を行っているスタッフ向けに、平成19年12月から名古屋地区の会員が研修会を継続的に実施しています。場所は、名古屋丸善

会議室、IAALの団体会員でもある愛知学院大学図書館情報センターにて行いました。今までのテーマは、レファレンスサービス、レファレンスサービス各論、整理技術、分類、NACSIS-CATなどとなっています。

IAALでは、会員の協力により、各地でこのような活動を広げていきたいと考えております。

■私立大学図書館協会東地区部会・ 研修分科会

平成21年度からの標記分科会の発足に際し、企画・運営の委託を受け、実施をしています。受入・整理・閲覧・施設という4分野における図書館業務をテーマとしつつ専任の図書館員に求められるマネジメント力、企画力の向上も目標に年4回の集合研修をしています。第1回、第2回に関しては、私立図書館協会のホームページより掲載の記事をご覧ください。

▶ <http://www.jaspul.org/e-kenkyu/el-ken-b/index.html>



第3回目研修分科会のテーマは、「目録の世界の新たな動向」。2009年10月16日(金) 13:00-17:00会場：埼玉大学東京ステーションカレッジ(東京駅隣接)にて、開催されます。

■史資料保存修復・デジタル化技術 最前線見学会

当法人会員の方へ、史資料の修復、貴重な書籍・文書類の保存修復そしてデジタル化の最前線の見学会を企画しました。去る平成21年8月27日15名の会員の皆様に参加いただきました。団体員会の株式会社大入様のご協力により、普段見ることのできない文化財も含め、最前線の匠の技術に触れることができました。

広報

■私立大学図書館協会総会・研究会

第70回私立大学図書館協会総会・研究会(佛教大学において平成21年8月27日から平成21年8月28日開催)第2回IAAL大学図書館業務実務能力認定試験「総合目録一図書初級」の広報活動を行いました。

■第11回図書館総合展・学術情報 オープンサミット2009(予告)

平成21年11月10日(火)~11月12日(木)にブースを出展します。展示内容としては、来る平成21年11月15日(日)に実施する「IAAL大学図書館業務実務能力認定試験」の類似問題をゲーム形式で楽しんでもらいます。また、オンライン・ナレッジデータベースのデモをご覧頂けます。

コンサルティング業務

行政からの指導がなされる 前の対策として

大学図書館における業務委託に関して、適正になされているかについて、顧問社会保険労務士と共にコンサルティング業務を行います。派遣、委託に関して、ご相談等ございましたら、当法人までご連絡ください。

〔IAAL H.P.〕 <http://www.iaal.jp/>



> COVER



株式会社 大入
作業場の隅には、出番を待つ道具が整然と並ぶ。
(p.6-7 記事参照)

IAAL 大学図書館業務実務能力認定試験

「総合目録-図書初級」第1回の概要と分析

前号に引き続き、2009年5月17日（日）実施したIAAL認定試験「総合目録-図書初級」の結果をご紹介します。

（問題例集<抜粋>と、解答と解説は前号をご参照ください。）

1. 概要

総合目録-図書初級 第1回

日 時：2009年5月17日（日）14:00-14:50

会 場：東京-代々木ビジネスセンター

名古屋-CHOTOホール栄

応募者数：221名

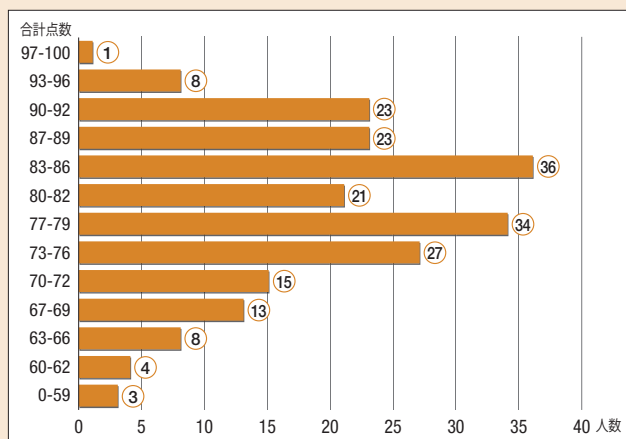
受験者数：216名

合 格 者：112名（合格率52%）

出 題：マークシート方式・二者択一・100問

2. 結果

全体の得点分布



最高得点	97点
得点中央点	80.00点
平均点	79.94点
標準偏差	8.51

得 点の分布は、83～86点と、77～79点の2つの山ができています。受験者の内、実際の目録業務に従事している方と、これから学習してチャレンジしようとされている方の2つの得点分布が合わさった結果になっていることが読み取れます。

問題の領域別正解率

領域	問題数	平均正解率
I. 総合目録の概要	30	78.70 %
II. 各レコードの特徴	15	83.87 %
III. 検索の仕組み	25	74.87 %
IV. 書誌同定	10	78.84 %
V. 総合	20	85.73 %

正 解率は各領域、およそ75%～85%となっています。難易度として、どの分野の知識も満遍なく必要ですが、殊に「検索の仕組み」について理解しているかという点が、合否を左右した結果といえるかもしれません。

問題に関して「簡単だったが、時間が短かった」「思ったよりひねった問題が少なかった、意外にストレートであった」という声が聞かれました。出題は、通常業務内で瞬時に判断される事を問うた問題といえます。

3. 付帯調査結果

勤務形態

	人数	全体に占める割合	内合格者の割合
大学正規職員	18名	8%	67%
企業正規職員	33名	15%	67%
非正規職員	144名	67%	46%
その他	21名	10%	57%

NII 講習会受講経験

	人数	全体に占める割合	内合格者の割合
あり	56名	26%	73%
なし	160名	74%	44%

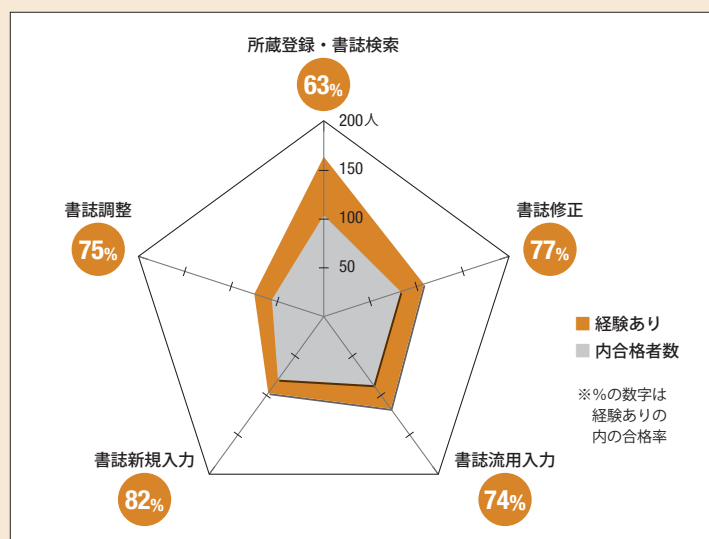
司書資格

	人数	全体に占める割合	内合格者の割合
あり	192名	89%	53%
なし	24名	11%	46%

NACSIS-CAT 経験年数

	人数	全体に占める割合	内合格者の割合
4年以上	99名	46%	79%
2-3年	32名	15%	44%
0-1年	85名	39%	24%

NACSIS-CAT の業務経験



受 験者の半数以上の方が非正規職員でした。また、約3/4の方は国立情報学研究所の目録システム講習会の受講経験なしと回答されています。終了後の聞き取り調査で「研修、ガイダンス等、現場で働くスタッフへの支援を期待したい」「体系的、基本的な学習が、実務の中だけではなかなか難しい。学ぶ機会がないので、講習会をしてから試験という流れが欲しい」というご要望がありました。

IAALでは、認定試験とあわせて、独自の研修事業も検討しています。また、国立情報学研究所が進めているe-ラーニング化（セルフラーニング教材開発）を、今後も支援していきたいと考えます。

司 書資格の有無については、受験者数の内約9割が「あり」と回答されています。その内の合格者の割合は、司書資格ありの方の合格率が、若干高くなっています。しかし、NACSIS-CAT 経験年数程の顕著な差はみられませんでした。認定試験として、4年以上の経験者が、8割近くが合格された結果は、実務能力の指標になり得るものといえます。

今回は第1回目でしたので、経験年数の高い受験者層が全体の半数近くでした。図書-初級の目標設定は、正確かつ効率的な検索と所蔵登録ができることですので、およそ経験年数2-3年の方を対象に想定していました。

合格者の中から、中級を早く行って欲しいという声が寄せられています。また、初級に関しては、経験年数2-3年の方が、より多く受験されることを期待します。

N ACSIS-CATの業務のタイプ別に経験有の人数と、その内の合格者の割合を示しています。

当然ながら書誌入力・修正・調整の経験者は、初級では高合格率でした。今回の目標である「所蔵登録・書誌検索」の業務を実際に行っている方の合格率は63%でした。NACSIS-CATや、目録の品質管理について考えなければならないという事とあわせ、経験の有無だけでは測れないものがあり、この認定試験が大学図書館及びそこで働く方々の指標として役立つものになるであろうと考えています。

「総合目録-図書中級」は、初級合格者を対象に、実施に向けて準備致します。

IAAL 大学図書館業務 実務能力認定試験

「総合目録—図書初級」第2回

実施日 ▶ 2009年11月15日(日) 14:00-14:50 (50分) 集合時間 13:40

1. 受験案内

- (1) 受験資格：受験資格の制限はありません
- (2) 試験方法：マークシート方式
- (3) 受験料：一般 3,000円
IAAL会員 2,000円
- (4) 会場：① 東京会場 ② 大阪会場

2. 受験申込方法

- (1) 受付期間：2009年 8月17日(月) から
2009年10月25日(日) 消印有効

- (2) 必要書類

- ① 受験申込書：ホームページ (<http://www.iaal.jp/>) からダウンロードしてご記入ください。

- ② 受験料の郵便振替振込請求書兼受領証(コピー可)：申込書に添付して送付。

郵便局備え付けの青色の払込用紙を使用して授業料を当法人の口座に入金してください。

詳しくは、当法人ホームページにて詳細、注意事項等ご確認ください。

【問い合わせ】

NPO法人 大学図書館支援機構

電話 03-5961-3401 FAX 03-5944-5087

メール info@iaal.jp

ホームページ <http://www.iaal.jp/>

今後の試験予定

- ① 総合目録—図書中級(初級合格者対象)
- ② 総合目録—雑誌
- ③ 利用者サービス
- ④ レファレンスサービス
- ⑤ 相互貸借(ILL) サービス

① 東京会場

TKP虎ノ門ビジネスセンター

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-12 虎ノ門ビル
TEL：03-3519-6533



<http://tkptora.net/access/>

アクセス

東京メトロ銀座線「虎ノ門駅」徒歩1分
東京メトロ日比谷線「霞ヶ関駅」徒歩2分
都営三田線「内幸町駅」徒歩4分

② 大阪会場

TKP大阪梅田ビジネスセンター

〒553-0003 大阪府大阪市福島区福島5-4-21
TKPゲートタワービル
TEL：06-4797-6610



<http://tkpumeda.net/access/>

アクセス

JR「大阪駅」・阪急「梅田駅」・阪神「梅田駅」・
地下鉄四つ橋線「西梅田駅」の地下街を通り、
6-2番出口出ですぐ。
JR線「福島駅」徒歩2分 阪神線「福島駅」徒歩5分
JR東西線「新福島駅」徒歩5分